

飛ぶ教室：あれから12年

高橋源一郎氏は筆者の好きな作家のひとりですが、実は、同氏の書いた小説を読んだことはなく、読んだのは「一億三千万人のための小説教室」（岩波新書、2002）と「高橋源一郎の飛ぶ教室―はじまりのこぼれ」（岩波新書、2022）くらいなのです。では、なぜ好きな作家なのか？と聞かれますと明確に答えることが出来ないのですが、ラジオ番組や書籍を通じた同氏の人となり胸に響くところがあって筆者だけでなく、多くのファンがいるのではないかと思います。それに、あらゆるジャンルとっていいほどたくさんの本を読んでいるのには驚かされます。作家だから当然だろう、と思われるかもしれませんが、「作家の中で僕ほど本を読む作家はいないのでは？」と自負するくらいですから並ではないと思います。たとえば、上記の「高橋源一郎の飛ぶ教室」には、新書版なのに紹介されている88冊の作品（全部が小説ではない）のうち、マイナーなものも多くあって、筆者が知っているのは数冊、読んだことのあるのは3冊しかありません。そのうちの1冊に、宇佐美りん著「押し、燃ゆ」（河出書房社、2020）というのがありました。最初この本を見た時に、恥ずかしながら、“押し”という言葉の意味を知らなかったが、読んでみてやっと理解しました。高橋氏の著書の中で、この書籍に触れているところでは、高橋氏の“押し”は、ボブ・ディランであることを知り、手をたたくような思いでした。ご承知のように、ボブ・ディラン（と呼び捨てにしていかがうかはわかりませんが）は、2016年ノーベル平和賞を受賞しました。ただ、授賞式には出席せずに、翌年の2017年にストックホルムで記念講演を行いました。その時の英文内容はネット

[\(https://www.nobelprize.org/prizes/literature/2016/dylan/lecture/\)](https://www.nobelprize.org/prizes/literature/2016/dylan/lecture/)でも公開されていますし、解説本（畠山 雄二著「英文徹底解説 ボブ・ディランのノーベル文学賞受賞スピーチ」、ベレ出版、2019）も出ていて、名文だという評価ですが、残念ながら著者にはその評価の是非はよくわかりません。ただ、高橋氏の“押し”がボブ・ディランというのは感激で、実は筆者も同感なのです。と言いますのも、代表曲「風に吹かれて」を中心にして彼の音楽が流れていた1960年代は大学紛争が吹き荒れていた時代で筆者もそれに巻き込まれたうちの一人でしたが、ボブ・ディランはそういう中でのヒーローでしたし、今でもそうです。なぜなら、「風に吹かれて」の歌詞を読み返してみても、今でも通じる内容でディランの才能の一端に触れるようです。

高橋氏の著書の表題にあります“飛ぶ教室”は、もともとは、ドイツの作家、エーリヒ・ケストナーの「飛ぶ教室」に由来するとのことでしたので、早速、電子書籍（高橋健二訳、岩波文庫、2006）で読んでみました。読んでみて、なぜ彼の著書やラジオ番組に“飛ぶ教室”と銘打ったのかが理解出来ました。ケストナーの作品は、友情、師弟愛、親子愛に満ちたヒューマンヒストリーで、随所にみられる高橋氏のやさしさに共通しているのです。

筆者にとって同氏との最初の出会い（とっていいのかわかりませんが）は、2012年4月2日から2020年3月12日まで続いたNHKラジオ第1放送の「すっぴん！」という朝の番組を聞いていた時でした。毎週金曜日のパーソナリティーが高橋源一郎氏で“ゲンちゃんの現代国語”と題して8年間で300ほどの作品を紹介し同氏なりの分析を聞かせるもので毎回納得させられものでした。作家ですから当

たり前のことですが、同氏の書き物やラジオでの語りは、“ことば”を大事にするところが多くの人の心に響くのではないかと思うのです。加えて、日の目を見ていないが秀逸と思われる作品を紹介する思いやりとやさしさを感じます。

「すっぴん！」が放送されていた当時、筆者はすでに大学を退職していましたが、公的な研究費を残していたことで大学のオフィス（水戸キャンパス）の使用を許されていたので、移動にはもっぱら車を使っており、その車の中でいつもラジオを聞いていました。この番組の後、「飛ぶ教室」が引き継ぐ形になっていますが、これも毎回楽しい内容になっています。

筆者は、2019年の1月、突然の病に襲われましたが、病後の今は、朝夕の散歩のときにいつもラジオを聞いています。テレビの4K放送や多機能なスマートフォンなどの急速な広がりの中で、ラジオの楽しさや大切さが忘れられがちですが、思えば、2011年の“東日本大震災”を引き起こした“東北地方太平洋沖地震”の直後は電気や水道がしばらく不通でしたので、たまたま自宅にあった携帯ラジオが唯一の情報源でした。“あれから12年”，政治を司る方々を中心に、昨今の社会情勢は、あの時の悲劇を忘れさせていく状況を醸し出そうとしているようで不安を覚えますが、初めて経験した未曾有の“連鎖災害”の教訓を長く生かしていく姿勢の大切さを改めて会員の皆様とご一緒にかみしめたいと思っています。



(高橋源一郎氏の著書)

カキーンという 余寒のなかの 球音は

待ちに待った 春の訪い^{おと}

(安原一哉，代表理事)